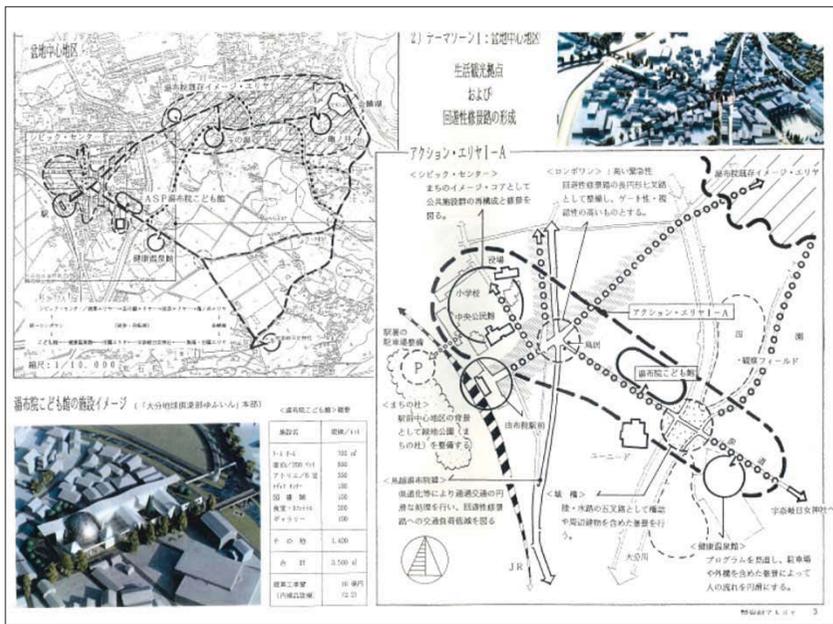


「過疎」を「適疎」と読み替え、疎であることが生活する上で適当であると逆手に取る。このコンセプトに基づき、磯崎新^{*1}と蓑原敬^{*2}の下で、新居千秋^{*3}、栗生明^{*4}と私の3人の建築家が農・山・漁村の3つのモデル地区にまちづくりの提案を行う。1990年〜1992年の3年間にわたり、そんな稀有なプロジェクトに参加する機会を得た。「一村一品運動」を繰り広げていた当時の平松守彦^{*5}知事の発想であった。3つの全く異なる地区を巡り、夜な夜な地元の人々と酒を酌み交わしながらの楽しくもハードな毎日であった。共同で膨大な現況調査を行ったが、具体的な提案は3人毎に担当地区を決めた。私はすでにブランド化が進んでいた湯布院の担当となった。そこで、フィールドワークとグループインタビューを駆使して、徹底的な社会学的調査・分析を行った。そして、外側からは解らない、様々な地区の問題や課題を明らかにすることができた。

湯布院はかつてひなびた温泉町で大型ホテルや歓楽街は整備されておらず、それがプラスに転じた。昭和40年代から町ぐるみで毎年夏に映画祭や音楽祭を開催し、歓楽色を排して女性が訪れたいくなるような環境整備が続けてきた。バブル期の大型開発計画には適正な規模や景観を守るため抵抗し、人気の過熱が続く現在も、温泉のあり方についての模索が続いている。一方、住民の中には土地を開発側に処分して楽をしたいという人たちも多く、

環境・文化的価値観との相克は根が深い。それは由布市への町村合併の際にも顕在化した。湯量が豊富で広い範囲で湯が湧くため、旅館が集積する必要がなかったことから敷地も比較的広く、町の造りはゆったりとしている。しかも開発規制により高層の巨大旅館・ホテルやけばけばしい温泉街もなく、一部を除き田園的な景観が守られている。このようなまちづくりは長年深く関わってきた旅館の主たちは、東京での文化的仕事の体験を活かし、今あるジレンマを孕んだブランドをつくり上げたのである。



図版98-1 湯布院計画パネル (© 岩村アトリエ)

*1 磯崎新(1931)..
日本の代表的建築家。
大分県出身

*2 蓑原敬(1933)..
日本の代表的都市計画家。
福岡県出身

*3 新居千秋(1948)

*4 栗生明(1947)

*5 平松守彦(1924)